



基盤的癌免疫研究会
Society for Fundamental Cancer Immunology

NEWSLETTER

VOL.12 NO.1

来年は小倉でお会いしましょう

第13回日本がん免疫学会総会

日時：平成21年6月24日(水)、25日(木)

場所：北九州国際会議場

〒802-0001 北九州市小倉北区浅野三丁目9番30号

Tel:093-541-5931 Fax:093-541-5928

総会会長：安元 公正（産業医科大学医学部第2外科学講座）

総会副会長：金澤 保（産業医科大学医学部免疫学・寄生虫学講座）

戸倉 新樹（産業医科大学医学部皮膚科学講座）

* 目次 *

[2008年12月発行]

1. 「第12回SFCI総会を振り返って」
 ・・・・遠藤 啓吾（第12回SFCI総会会長
 群馬大学大学院 医学系研究科 放射線診断核医学専攻）
2. 「特別講演を聞いて」
 ・・・・花岡 宏史（群馬大学大学院 医学系研究科）
3. 「シンポジウム“ここまで進んだ抗体のトランスレーショナル・リサーチ、臨床応用”に参加して」
 ・・・・石田 高司（名古屋市立大学大学院 医学研究科 腫瘍・免疫内科学）
4. 「ワークショップに参加して」
 ・・・・西田 純幸（大阪大学大学院 医学系研究科 癌ワクチン療法学）
5. 一般演者より「第12回SFCI総会に参加して」（五十首順）
 ・・・・川村 直（慶應義塾大学医学部 先端医科学研究所 細胞情報研究部門）
 ・・・・原嶋奈々江（島根大学 医学部 免疫学）
 ・・・・福島 聡（熊本大学大学院 医学薬学研究部 免疫識別学）
6. 特別寄稿
 「橋本嘉幸先生を偲ぶ「学問第一優先」」 伊東 恭悟（久留米大学 医学部 免疫治療学講座）
 「橋本嘉幸先生が主宰された橋本班のこと」 今井 浩三（札幌医科大学）
 「橋本嘉幸先生の急逝を悼む」 菊地 浩吉（札幌医科大学）
 「橋本先生を偲ぶ」 珠玖 洋（三重大学大学院 医学研究科 がんワクチン治療学）
 「橋本嘉幸先生のニューヨーク留学時代」 高橋 利忠（健康科学総合センター）
 「橋本嘉幸先生を偲ぶ」 西村 孝司（北海道大学 遺伝子病制御研究所 免疫制御分野）
 「橋本嘉幸先生を偲ぶ」 濱岡 利之（大阪大学）
 「天上の橋本嘉幸先生へ」 益子 高（近畿大学 薬学部 細胞生物学研究室）
 「橋本嘉幸先生を偲ぶ」 八木田秀雄（順天堂大学 医学部 免疫学）
7. 学会への移行・橋本嘉幸先生を偲ぶシンポジウム開催のお知らせ

「第12回SFCI総会を振り返って」

群馬大学大学院 医学系研究科 放射線診断核医学専攻 遠藤 啓吾

大宮ソニックシティ(埼玉県)で開催された第12回SFCI総会に多数の方にご参加いただきありがとうございます。

2月に行われた幹事会、総会打合せの際には、橋本嘉幸先生には今回のSFCI総会に対し様々な有益な助言をいただきました。総会後には幹事達と一緒に群馬の伊香保温泉に宿泊することを約束、我々も楽しみにしていました。ところが4月に橋本先生急逝の報に接し、深い悲しみとともにSFCI総会への影響があるかもしれないと杞憂しましたが、幸い250名と多くの参加者に来て頂くことができました。特に非会員の参加者が多く、そのためでしょうかプログラムがよく売れるというおまけもつきました。

ハーセプチン、リツキシランを代表として次々と新しい抗体の臨床応用が始まっています。副作用は少なく、よく効きます。ただ残念ながら現在臨床使用されている抗体の多くは日本で作られたものではなく、外国で開発されたものです。これまでのSFCI総会でも細胞性免疫、癌のワクチン療法については、演題数も多く、議論も活発に行われていますが、抗体についてはイマイチでした。そこで第12回SFCI総会では抗体治療についてももっと関心をもっていただきたいと考え、プログラムを構成した次第です。

北里柴三郎が抗体療法の先駆者から分かるように、日本にはすぐれた抗体の研究者が数多くいます。抗体の研究レベルでは決して外国にひけをとりません。そこでシンポジウムでは、わが国で開発された抗体にしばった発表を企画しましたが、シンポジストからは画期的な成績が数多く報告されま

した。日本の抗体研究の未来は明るいものでしょう。一般演題では抗体治療に関する演題は少なかったのですが、SFCIを通じて癌の抗体治療の研究が少しでも活発になればと思っている次第です。

橋本先生とは私がまだ駆け出しの若かった頃の共著が一つだけあります。第一著者の佐賀恒夫先生(放射線医学総合研究所、今回の総会で一般演題の座長)の学位論文でしたが、益子高先生(近畿大学、今回の総会でシンポジウム座長)の作製したErbB-2に対する抗体がマウスに移植した腫瘍に特異的に集まり、癌に効くのではないかと、という内容でした。同じく共著の山本 雅先生(東京大)、秋山 徹先生(東京大)と一緒に、この抗体の権利を有していたA社の本社を訪問し、抗体の臨床研究を働きかけましたが、残念ながら断られてしまいました。その後、同じ抗ErbB-2抗体は米国でハーセプチンとして開発されましたが、当時は抗体が癌にこれほど効くとは考えられなかった時代だったからでしょう。逃がした魚はいつも大きいようです。

私自身、抗体については若干の知識がありますが、癌ワクチン、細胞性免疫についてはまったくの素人です。今回のプログラム作成にあたっては河上裕先生に助けていただきましたし、総会運営にあたっては鈴木良子様大変のお世話になりました。

不慣れな運営で多くの方々にご迷惑をおかけしましたがお許しください。次回第13回SFCI総会で会員の皆様に再びお会いできることを楽しみにしています。

「特別講演を聞いて」

群馬大学大学院 医学系研究科 花岡 宏史

第12回SFCI総会では、1日目の午後に抗体療法についての最新の話題が集められ、抗体を用いたがん治療について再注目する場となった。その一つとして、特別講演ではDavid Colcher博士をお招きし、“Monoclonal Antibodies for Imaging and Therapy”と題して放射性核種(RI)で標識した抗体を用いたがん診断、治療に関するお話を拝聴した。RI標識抗体によるがん治療(放射免疫療法)は我が国ではまだ馴染みのない治療法であるが、海外では既に優れた治療成績をあげており、我が国でも2008年1月にイットリウム-90(^{90}Y)という治療用RIで標識した抗CD20抗体が悪性リンパ腫の治療薬として認可されている。Colcher博士には本講演において、まず放射免疫療法の基礎について分かりやすく解説していただいた。日本では様々な核種を入手し研究するのは非常に大変なことであるが、アメリカにおいては比較的簡単に使用することができるという状況を聞き、非常に羨ましく思いました。その後、RI標識抗体を用いたがん治療の例をお示しいただいたが、欧米においては種々の分子を標的とする抗体治療薬が盛んに開発されてい

るだけでなく、RI標識抗体に関しても予想以上に多くの標的に対して研究が行われていることを改めて認識した。RI標識抗体では抗体単独の治療よりも高い治療効果が期待できるというのは紛れもない事実であるが、固形がんに対する治療においては、大きな成果はあげられていないのが現状であり、治療効果を高めるために種々の方策が検討されているとのこと。固形がんに対する治療法が確立されれば、放射免疫療法は様々ながんに対する優れた治療法となりうる。今後の研究の伸展に期待したいところである。また、RI標識抗体および蛍光標識抗体を手術時に用いることにより、腫瘍の残存を確認しながら手術を進めるという試みについてのご講演も非常に興味深いものでした。特別講演後のシンポジウムにおいて、我が国の抗体研究の非常にすばらしい成果を目の当たりにし、放射免疫療法の分野においても日本発の薬剤を開発し、すばらしい成果を発表する日を目指して、さらなる研究に励みたいと思う。

「シンポジウム“ここまで進んだ抗体のトランスレーショナル・リサーチ、臨床応用”に参加して」

名古屋市立大学大学院 医学研究科 腫瘍・免疫内科学 石田 高司

SFCIの会員の皆さま、大変暑い日が続いていますが如何お過ごしでしょうか(本日8月19日)。第12回SFCI総会では、大変僣越ながらシンポジストを仰せつかりました。その上、今回『シンポジウムに参加して』と題してSFCI NEWS LETTERの執筆までも仰せつかり、いったい何を書いたらよいのやら、とSFCIのホームページに入り込み、過去数年間のNEWS LETTERを読み終えたところがあります。本来ならば、シンポジウムの各演題を、この稿でご紹介するのが常套だと思うのですが、私などでは適切にサマライズできない可能性があるため、今回はあえて避けることにいたします。また、実は私、SFCI総会への参加は今回が初めてでありました。本稿では、そんな私が普段から考えている『がん免疫療法』について、形式にとらわれずに書かせて頂きたく存じます。

私は、今年で医学部卒業13年目になる血液内科医であります。総会のプログラムを拝見しますと、SFCI会員のなかで臨床血液内科医の占める割合が極めて低いことに改めて驚かされます。さて、血液内科の醍醐味は、白血病/悪性リンパ腫などの造血器腫瘍患者さんに対し、治癒を目指した薬物療法(抗癌剤治療)を行うことができる点にあります。これは、成人の他の進行期固形癌の治療との決定的な違いです。そして、私どもの領域の究極の治療として、同種造血細胞移植療法があります。最近ではいわゆる『ミニ移植』という移植前処置薬を軽減し、移植後のgraft versus leukemia/lymphoma(GVL)効果で難治性の造血器腫瘍を治癒に導くコンセプトの移植が、“特別な移植”ではなく、私どもの施設でも、同種造血細胞移植の約40-50%を占めるようになってきています。この同種移植は『がん免疫療法』そのものであります。既存の薬物療法では治

癒が望めない患者さんに同種造血細胞移植療法を選択し、免疫抑制剤の投与量を調節することによりgraft versus host disease(GVHD)を最小限としながらも、GVL効果を引き出し、治癒をもたらし得たときこそが、まさに血液内科医冥利につきるときなのであります。しかしながら、上手にいくときばかりではありません。HLA-A, B, DRB1の三座をDNAレベルで一致させたドナーからの移植であっても、手がつけれない重症のGVHDが発症することがあります。全身の皮膚は強い炎症で剥離し、腸管からは3L/dayをこす血便がとめどもなく続き、便には剥がれ落ちた腸管粘膜が混ざります。ステロイドなどの免疫抑制剤を投与しても腸炎はおさまらず、連日の大量の出血、また感染の合併により多臓器不全におちいります。同種造血細胞移植療法が、疾患の治癒を目指して行う治療であること、一般的に、移植する時点では患者さんは比較的元気であることから、患者さんも医療者も、そして家族も、最後の最後まであきらめることができずに、このGVHDに立ち向かいます。しかしこのような重症GVHDを発症した際の予後は厳しいのが現状です。我々が、『ヒトの免疫とは、かくも強力かつ激烈なものなのか』と無力感にうちひしがれるときであります。なんとかこの強力なヒト免疫を操って、がん治療ができないものか、それが、私のがん免疫療法の研究に携わるようになった動機であります。

さて、今回の研究会の2日間、どっぷりとがん免疫研究につき、非常に有意義な時間を過ごすことができました。初参加の感想は、『本研究会は健全な免疫おたくの集いである』ということです。会として大きすぎず、小さすぎず、おそらく参加の皆さまは互いに顔見知りなのでしょう、アット

Society for Fundamental Cancer Immunology

ホームな雰囲気、建設的な質疑応答がなされていたのが印象に残りました。このようなすばらしい研究会に参加・発表の機会を与えて頂きました、会長の遠藤啓吾先生に感謝の気持ちでいっぱいです。これを機

会に、来年から、本研究会を自身の年中进行事の一つとして積極的に参加させて頂きたいと存じます。皆さま、今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

「ワークショップに参加して」

大阪大学大学院 医学系研究科 癌ワクチン療法学 西田 純幸

基盤的癌免疫研究会総会への参加は、今回が初めてでした。私と癌の免疫治療との出会いは以前からあり、造血器腫瘍に対する造血幹細胞移植が始まりでした。外科的治療以外で癌を治癒できる治療法は免疫療法である、癌の免疫療法に関する私の知識は今でもその程度しかありませんが、そのような私を第12回基盤的癌免疫研究会総会ワークショップの演者としてご推薦いただいた私の恩師杉山治夫先生に御礼申し上げます。

今回のワークショップのテーマは、「癌ワクチンの標準化を目指して」でした。演題発表の依頼を受け、このタイトルを聞いた時、「癌ワクチンの標準化」とは難しい内容だと思ったのが第一印象でした。近年、世界では癌ワクチン療法の第Ⅱ相試験、更には第Ⅲ相試験が多く進められています。日本ではどうでしょうか。多くの癌免疫に関する基礎研究の成果から新たな癌治療として癌ワクチン療法をはじめとした癌の免疫療法の将来の発展性が期待されているものの、日本で実施されている癌ワクチン療法多くが、癌患者の“最後の望み”になっている傾向があり、その中で得たわずかな有効例をもとに議論されているにすぎないと思われ。基礎研究の成果は、最終的にヒトでの成果に結びついてはじめて評価されるものであり、研究者の自己満足に終わってしまうものであってはなりません。科学的根拠に基づいた癌ワクチン療法の実施可能性、有効性を証明するために臨床試

験は必須であり、これを通じてのみ多くの臨床医に理解され、受け入れられてはじめて癌ワクチン療法の標準化が見えてくるのではないのでしょうか。そのような臨床試験の実施が日本ではまだ乏しく、その実施体制作りが急務であると思います。

しかし、ひとことで臨床試験の整備といっても多くの問題が残っています。今回の総会でも多く議論されたことの一つに、免疫療法の効果判定がありました。患者に施された治療が癌に直接作用し、その効果も比較的早期に現れる化学療法や放射線治療とは異なり、間接的作用から効果を期待する免疫療法の特性に準じた有効性の証明方法を見直す必要があります。更に、その効果が実際に免疫学的な機序によって現れたものであることを証明するための免疫学的モニタリングの確立が必須事項ではないでしょうか。科学的根拠に基づきかつ一般臨床において実施可能な単純なものでなくてはなりません。このモニタリングの確立そのものも、結局は臨床試験を通じてのみ検証できるわけであり。

基盤的癌免疫研究会が近い将来、学会になる構想があると聞きました。癌治療トランスレーショナルリサーチの先駆者として本研究会が推進の原動力となるのみならず、多くの研究者、臨床家が一同に会し、免疫療法が“標準的な”集学的癌治療の1つの大きな柱になるよう活発な議論の場となり、世界をリードする会となることを願っております。

「第12回SFCI総会に参加して」

慶應義塾大学医学部 先端医科学研究所 細胞情報研究部門 川村 直

今回、第12回SFCI総会に、“siRNAライブラリーを用いた癌免疫回避シグナルの同定”という演題で参加させて頂きました。昨年の第11回大会では、私はオーディエンスの1人として参加し、会場での非常に活発な質疑応答に圧倒され、こんな厳しい学会には出たくないと思ったのと同時に、自分がこの学会で発表する事はないだろうと決めこんでいました。しかし、第12回大会への参加が決定した時に、“どうせやるなら少しでも良い発表を”と腹をくくり、SFCI総会を目標に研究や発表の準備を行う事ができました。発表当日は朝から緊張し続けましたが、発表が終了した時にはホッとしたのと同時に、発表を無事に終えたという達成感がこみ上げてきました。発表後のディスカッションでは、今後の研究の方向性に関わる質問もあり、非常に有意義な学会となりました。

私が、このSFCIについて知ったのは、現在所属している研究室に進学してからになります。学部生時代の私は、有機化学という、腫瘍免疫とはかけはなれた分野で研究を行っておりました。こんな私に、腫瘍免疫の世界での研究を行うきっかけを作って下さったのは、現在、御指導いただいている河上先生であります。河上先生が理工学部対象に行っていた授業を、はじめは単位

を取るという軽い気持ちで受講しておりましたが、自己の免疫で癌を治療する事が可能であるという河上先生の熱弁に興味を抱き、現在所属している研究室に進学する事を決意致しました。河上先生の授業が腫瘍免疫学との最初の出会いであり、現在行っている研究の第一歩であったと思います。それから、2年経った今年。腫瘍免疫の研究に携わるようになったばかりの新米ほやほやの私が、諸先生方の前で発表をするという機会を得られたのは、SFCIが掲げている若手研究者の育成の理念があったからだと思います。今回の総会では、私と同年代の研究者の発表もあり、自分ももっと頑張らなければと気持ちを新たにすることができました。

腫瘍免疫の分野の研究を始めて2年余り。まだまだ、腫瘍学、免疫学ともに勉強し始めたばかりですが、この分野の第一線の研究をされている先生方の講演や議論を聞いていると、いかに腫瘍免疫学が大切であるかという事を肌で感じ、我々若い世代が、諸先輩方が築き上げてきた腫瘍免疫学の分野をさらに発展させていかなければならないという事を実感致しました。まだまだ研究を始めたばかりではありますが、来年の第1回日本がん免疫学会総会でも発表できるよう、今年1年頑張りたいと思います。

「第12回SFCI総会に参加して」

島根大学 医学部 免疫学 原嶋 奈々江

私は今、縁結びの神様で有名な出雲大社がある島根県出雲市にいます。そこで、縁あって出会った多くの先生方と腫瘍免疫について、かなり個人的視点ではありますが「縁が結んだもの」というテーマで、本稿を書くべくキーボードを打っております。

思い返せば12年前、キラーT細胞が癌細胞をやっつける、と言われてもよく理解できなかった頃、何の因果か久留米大学伊東恭悟先生の免疫学講座で大学院生になりました。知識も薄っぺらな大学院1年生の夏、いきなり第1回SFCIに参加(第1回総会会場は、奇しくも後に私が勤めることになる東京医歯大の目の前でした)し、諸先生方の発表と白熱した議論を拝聴。が、当時の私にははっきりいって全てが“宇宙語”。それでもSFCIでの数々の発表を思い出しつつ、久留米で必死にCTLを培養しました。久留米大学の諸先生方の情熱的且つ厳しいご指導により、単にラボワークだけでなく治験というものを直に体験させていただく機会にも恵まれました。大学院時代に同じ時を過ごし「打倒！癌」に向かって切磋琢磨する仲間を得たことも、きっと何かの縁。短期間ではありますが、群馬にある某麦酒会社でDC療法研究していたこともあり、本年の総会長が群馬大の遠藤先生と伺い「これも何かの縁？」と感じました(縁というより群馬つながり?)。東京医科歯科大学神奈木真理先生の講座スタッフとなった時、今度は西南日本に多いATLが研究のターゲットに。鹿児島出身の私

がATL研究だなんて、まさにこれも縁。ミニ移植後のATL患者に対するT細胞応答研究で、HTLV-1特異的CTLが認識するエピトープを同定することができました。その後縁あって米国留学へ。今回発表させていただいた研究の責任者でありNHLBIでのsupervisor・Dr. Childsのラボで、bench-to-bed side研究を肌で実感してきました。

そして今、島根にいます。これも何かの縁でしょう。これまで行った先々のラボで多くの先生方に熱心にご指導いただいたからこそ、今の私があります。壇上から早く降りたいほどの緊張感と闘いながらも、SFCIで自分の研究成果を発表できましたし、フロアでポスター前で夜の居酒屋で、厳しくも温かいご助言をいただくチャンスに何回も恵まれました。全てがタイミングと縁が生んだ、私の財産だと思っています。

SFCI 12年の歴史は、まさに私の人生における腫瘍免疫学との出会いと研究の歴史(ちょっと大袈裟でしょうか)。SFCIは躍進し、毎年盛りだくさんの演題と白熱の討論、そしていよいよ来年研究会から学会へ。一方私にとっては、まだまだ研究者として発展途上・・・SFCI設立発起人の一人である橋本嘉幸先生の癌治療研究への情熱や若手育成へのご尽力と功績に恥じぬよう、そして何より患者さんのために、自分自身ますます精進しなければと、出雲の空の下で白衣の袖をまくりつつ強く思うのでした。

「第12回SFCI総会に参加して」

熊本大学大学院 医学薬学研究部 免疫識別学 福島 聡

私は皮膚科医として7年間働いた後、3年前遅まきながら、大学院生となった。医者になってから、ひたすら臨床の力をつけることだけを考えてきたが、ある時ふと、新しい治療法の開発に関わりたい、と思うようになった。メラノーマの免疫療法が、すでに臨床研究としてある程度の実績を挙げてきたことは、みなさんご存じの通りであるが、今後はより強力で、汎用性のある、つまり一部の研究機関だけでなく、地方の病院でも使用できるようなワクチンの開発が望まれる。私のテーマはメラノーマに対する腫瘍抗原遺伝子導入ES細胞由来樹状細胞(ES-DC)療法の開発である。

私がSFCI総会に初めて参加したのは第9回で、まだ研究をはじめて3か月の頃。まったくといっていいほど理解できなかった。しかし癌免疫にまじめに取り組んでいるひとが日本にこれだけいる、熱く議論を交わす自分とあまり変わらない年齢の研究者がいる、ということを知ったのは収穫だった。そして、大学院も4年目にもなれば、自分もあの壇上でプレゼンするような仕事ができるだろうか？熱く質問すべくマイクの前に立つようになるだろうか？と考えたりしていた。教室の先輩がES-DCについて発表した、フロアの反応はいまひとつだった。ES細胞からDCなんて作ってどうするの？実現化なんてできっこないでしょ？誰もそこまでは言わなかったが、なんとなく、そうい

う雰囲気を感じた。悔しかった。

今回、第12回SFCIに久しぶりに参加して、発表する機会を得た。iPS細胞が発表されてから、stem cell biologyは大きな転換期を迎えた。我々の研究もすでにES-DCテクノロジーのiPS-DCへの応用へと進んでいる。もちろんまだまだ臨床応用への道のりは遠いが、決して絵空事ではないと考えている。私の演題にもたくさんの質問があり、あたたかい意見も頂いた。

演題は興味深いものが多く、とても楽しく充実した二日間をすごした。とくに抗治療法の隆盛を目にし、がん幹細胞をターゲットとする免疫療法に可能性を感じた。また今回は参加前からプログラムをみて、個人的に心に決めていたことも果たせた。興味ある分野の先生と面識を持つことである。最近ES-DCに α GalCerを負荷し、NKT細胞を活性化する実験をおこなっていたが、解らないことばかりだったのだ。懇親会で藤井眞一郎先生、本橋新一郎先生を見つけて質問攻めにした。ありがとうございました。また各地の若手研究者とその後もメールのやりとりをしている。こういったことがコンパクトかつパワフルなSFCIの醍醐味だと思う。

卒業後は臨床にもどる。何年後になるかわからないが、メラノーマの臨床試験データをSFCIに報告できるように、がんばりたい。

橋本嘉幸先生を偲ぶ

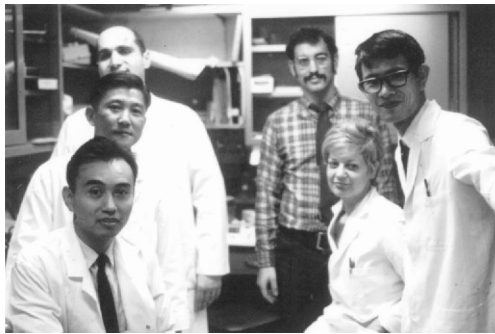
橋本先生のご経歴

氏名 はし もと よし ゆき
橋本 嘉幸
生年月日 昭和 5年 6月20日
出生地 東京



- 学歴 1949(昭和24)年 3月 学習院高等科(旧制)1年終了
1953(昭和28)年 3月 東京大学医学部薬学科卒
1958(昭和33)年 9月 東京大学大学院博士課程修了(石館守三先生に師事)
- 称号 薬学博士(東京大学)、医学博士(東北大学)、東北大学名誉教授
- 専攻 衛生化学
- 職歴 1958(昭和33)年 6月-62年 6月 東京大学薬学部助手
1960(昭和35)年 4月-62年 4月 Roswell Park Memorial Institute留学
1962(昭和37)年 7月-75年 3月 (財)東京生化学研究所主任研究員
1967(昭和42)年 4月-67年 4月 Sloan-Kettering Institute留学
1975(昭和50)年 4月-94年 3月 東北大学薬学部教授
1993(平成 5)年 4月-94年 3月 東北大学薬学部長
1994(平成 6)年 7月-03年 8月 日本学術会議会員
1995(平成 7)年10月-01年 3月 財団法人佐々木研究所所長
1999(平成11)年 7月-08年 3月 学校法人共立薬科大学理事長
2008(平成20)年 4月 慶應義塾常任理事
- 学会 1993(平成 5)年 日本癌学会会長
基盤的癌免疫研究会初代会長
日本薬学会理事、日本癌学会理事(名誉会員)その他
- 委員 文部(科学)省、厚生(労働)省、科学技術庁等各種委員会委員
厚生労働省癌研究推進事業運営委員、評価委員
高松宮妃癌研究基金学術委員
国立癌センター審査委員
科学技術会議専門委員
大学設置・学校法人審議会専門委員
その他
- 受賞 1985(昭和60)年 2月 高松宮妃癌研究基金学術賞
1988(昭和63)年 4月 日本薬学会賞
1993(平成 5)年10月 紫綬褒章
1997(平成 9)年 9月 日本癌学会吉田富三賞
2006(平成18)年 9月 叙勲(瑞宝中綬章)

橋本嘉幸先生を偲ぶ



68 Dr.Old's Labにて、高橋先生と



76 癌免疫講演後吉永小百合さんと



76 峨峨シンポ後登山



76 日米癌SanDiego 山村先生と



76 日米癌SanDiego 北川正保先生と



77 峨峨シンポ塚越先生と



78 日米癌オアフ徳永先生と

橋本嘉幸先生を偲ぶ



82 東北大学薬学部教授室にて、癌学会当日



82 天川村川迫谷小田島記念碑”和’



86 癌学会札幌菊地宅



88 高松宮妃癌シンポ招宴にて



89 免疫班会議峨峨にて

橋本嘉幸先生を偲ぶ



91 癌特シンポ長崎



92 橋本班会議班長挨拶



95 橋本伊東夫妻札幌



95 橋本伊東夫妻札幌ラーメン



00 札幌INFAラーメン屋



01 SFCI津SFCI首脳と



01 SFCI津お弟子さんに囲まれて



04 SFCI札幌橋本菊地二人の最後の写真

「学問第一優先」

久留米大学 免疫・免疫治療学講座 伊東 恭悟

もしかしたらSFCIのメンバーの中で、私が最後のお教えを賜った生徒かもしれません。突然の病魔に襲われる前日(2008年3月31日)のお昼に、共立薬科大学理事長室へお電話したところご在室でありご相談できました。相談内容はSFCIの活動方針に関する事でしたがとにかく「学問第一優先」で臨みなさい、と一貫して変わらないご指導を賜りました。最後に今後の連絡先をお尋ねしたところ、明日からの勤務先(慶應大学)はあとで教えるからとの事でありました。

橋本先生に最初にお会いできたのは、約30年前(1978年頃)の仙台ホテル2階会議室でした。当時、東北大学の4大がん免疫学者(石田名香雄医学部教授、橋武彦抗酸菌研究所教授、橋本嘉幸薬学部教授、歯学部熊谷勝男教授)が毎月か隔月毎に会合をもたれておりました。木曜日開催でしたので「木曜会」と呼ばれており、がん免疫学に関する最新の話題や各研究室での研究成果が発表される学術交流の場であり、石田名香雄先生を筆頭に1歳違いの仲良し会でもあると小生の師匠であられる熊谷勝男先生が教えてくれました。当時、石田研ではがん関連マクロファージの研究、橋研ではT細胞検出法や補体の研究、橋本研ではがん抗原の研究、熊谷研ではB細胞やNK細胞の研究が盛んでありました。小生は弘前大学第1外科学教室からがん免疫を勉強するため熊谷研のお世話になったばかりの新米でした。既にご質問の内容は忘れましたが「木曜会」で発表させられた際に、橋本先生はパイプを片手にしながら、質問して下さったように覚えております。

また、橋本班の班会議は仙台近郊の作並温泉で宿泊しながら開催され、そこには高橋利忠先生をはじめ日本の著明ながん免疫学者がお見えになっておられました。そのようなご縁で、当時橋本研で活躍されておられた(現北大教授)西村先生や(現近畿大学)益子先生とも知り合いになれ、がんを次々と殺す夢の細胞「LAK細胞」(西村先生)や、がん抗原を認識する夢の抗体(益子先生)などの先駆的な研究の一端にふれることができました。

本格的にご指導を仰ぐことができるようになりましたのは1996年SFCI発足時期からであります。第1回SFCI総会(橋本会長)は東京御茶ノ水ガーデンパレスで開催されました。当日の朝早くから先生は会場の前に立たれて「オイ、ヤギタ(順天堂大学八木田秀雄先生)、ダイジョウブカナ(参加者が来ていただけるかどうか)」と心配されておられましたことが昨日のように思い出されます。SFCIや学会でご指導をいただいた以外にも、佐々木研究所や共立薬科大学にお伺いして、鰻(佐々木研時代)やお寿司(共立時代)をご馳走になりながら、がん免疫療法の基礎・臨床研究とその実用化についてご指導を仰ぎました。その都度「学問第一優先」で考えなさいとのお言葉をいただき明るい方向性を見出すことができました。先生のご意思を受け継いで微力ながら基盤的がん免疫学の発展に尽くす所存です。橋本先生、長い間ご指導本当にありがとうございます。紙面をお借りして心からご冥福をお祈り申し上げます。

「橋本嘉幸先生が主宰された橋本班のこと」

札幌医科大学 今井 浩三

文部省時代に橋本班という癌特別研究(科学研究費補助金)があった。全国から、10名ぐらいの班員とその関係者が橋本先生の下に集まり、研究成果を発表する、そんな集まりだった。ある時、作並温泉で班会議があった。そこで小生は、高橋利忠先生や珠玖 洋先生にお会いし、大きな衝撃を受けたと記憶している。両先生はアメリカから帰られてそれほど時間もたってなかったのかもしれないが、とにかく、そのお話は新鮮で、留学しなければ進歩はないと感じた。留学して新しい知識・考え方を身につけることの重要性をそのとき教えていただいたように思う。橋本班は他流試合ができる道場のようなだった。橋本先生は、一つ一つの研究発表にかならずコメントや質問をなされていた。決してこれで良いということは

なかった。いつもこの会議は恐怖でもあり、楽しみでもあった。後にこの会議の出席者はSFCIの中心的役割を果たすことになった。このような班会議がもう少し多くあれば、さらに情報が密になり、癌免疫研究全般が押しあげられることになる。若い研究者にとって重要なことは、素晴らしい研究をなした超一流の研究者になるべく多く接することである。そのことが、日々の研究生活のアクセントになり、モチベーションにもなる。そして、そのような貴重な経験をさせていただいた我々の責任は、若い研究者にそのような機会を与え、より実効性の挙がるシステムを構築することであろう。そのような役割を果たすよう橋本先生からおおせつかったような気がする。

「橋本嘉幸先生の急逝を悼む」

札幌医科大学 名誉教授 菊地 浩吉

橋本嘉幸先生の訃報はまさに晴天の霹靂で、あまりの衝撃にとっさに声も出なかった。電話の西村さんの声も詰まって無言の通話がどのくらいだったのか覚えていない。いつもお元気で顔を見せてくれるのが当然と思いこんでいた。

振り返るとかれこれ50年近いお付き合いになる。最初は生化研から、移植癌を藁で治したラットにもう一度同じ癌を植えても植わらない、そのメカニズムの報告だった。当時は癌の免疫などをしていたのは、北海道の武田一門だけだったので、私達若手は飛んで火に入る夏の虫があらわれたと喜んだ。次にお会いしたのはSloan-Kettering癌研。先生はDr. Old's Labに1年間滞在され、その後高橋利忠、板倉克明、珠玖 洋、上田龍三、中山睿一などの俊秀が相次いで留学した。私は橋本、高橋両先生と同時期に2階上のDr. Southam's Labでヒト癌の免疫反応のin vitro assayを試みていた。Old先生のLabは血清反応に重点を置いていたが、橋本先生は私と同じく免疫リンパ球が癌細胞を破壊する現象に興味を持っていたので、時々会って情報を交換した。その頃橋本先生は「抗体による癌細胞の破壊は細胞膜から起こるが、免疫リンパ球の場合、細胞膜の変化に先行して核の破壊が起こる、何故か」と形態学者のはしくれである私に質問した。私もその現象は見ていたが、細胞が死ぬのだから核の変化は当然と気にも留めていなかった。「それは細胞が破壊する時におこる核崩壊とか核濃縮という変化で、病理学の教科書にも記載されていますよ」と事も無げに答えたと思う。Kerrらのアポトーシスの概念が出たのはその数年後であった。

帰国後先生は癌特の癌免疫研究班を組織

され、いつも私を班員に加えてくれた。先生は主として細胞性免疫の機序、特にキラー細胞の解析に精緻な研究と秀れた門下生を育てられた。癌免疫ばかりでなく、in vitro発癌、抗癌細胞mAb、抗体修飾リボソーム研究などの確固たる業績を残して居られる。私は癌の免疫研究は自家癌系でなければ意味がない、それもヒトで、などと勝手なことを言ってさっぱり目覚ましいデータが出なかったが、先生は私の我がままを許してくれた。特に北川正保先生、山村雄一先生が亡くなってからは、日本の癌免疫研究の代表者として、“免疫で癌を治さないと信用出来ない”などと云う風当たりを一身に受けて苦勞された。いつも日本の癌免疫研究の発展に心を砕いて居られた。

先生とは癌学会、免疫学会はもとより、日米癌セミナー、高松宮妃癌シンポ、映画作成、癌免疫の叢書など多くの場でご一緒させていただいた。先生は暖かいお人柄で面倒見がよく、私とは2つぐらいきり違わないがいつもかなり年上の兄貴分のような感覚で甘えてきた。班会議や学会の後、よくピンポン、麻雀などをしたが、何をやっても私は負けっぱなしで、唯一勝てるのは酒ぐらいなものであった。登山もしたが、すすいと先に登って、「北川さんも、小田島さんも俺と一緒に山登りをした後急死した。あんたも…」と私を脅かした。

札幌ではきまってラーメンを所望された。好物というよりこちらの懐をおもんばかってのことだったかも知れない。最後の大事なことが一段落したら癌の免疫のことなど忘れて、老後をゆっくり楽しもうと語り合っていたが、願いはかなわなかった。細やかな気配りがお命を縮めたのではないかと残念でならない。

「橋本先生を偲ぶ」

三重大学大学院 医学系研究科 がんワクチン治療学 珠玖 洋

橋本先生が逝かれた。突然の訃報は到底直ぐに受け入れられるものではなかった。ほんの1ヶ月前、文科省の「がん特定」のシンポジウムの午前中、隣の席にご一緒しお話をさせて頂いた。日本の癌免疫研究を、どの様にして維持、発展させるかについて心配もされ、又様々な示唆も頂いた。

まさかの思いと驚きは、上野の寛永寺でのお通夜、告別式を迎えるなかで、とめどもなく深い悲しみと、ふくらみ続ける不安感にも似た空白感に入れ替わっていった。

今日の日本の癌免疫研究に橋本先生の果たされてきた役割りは極めて大きい。先生御自身が研究者として、幅広い癌に対する細胞性免疫や各種のモノクローナル抗体の作製とそれを用いたいわゆるミサイル療法への応用などを始めとして多くの業績を築いてこられた。研究内容や手法のいつも先端におられると同時に、時代の流れに沿っての研究に対する冷静な批判者でもあった。時の趨勢に一方的に偏ることなく、いつもバランスの良い視角で癌免疫研究の発展を眺めておられた。

約30年間に渡って、先生は日本の癌免疫研究のリーダーであり、暖かいサポーター

を努められた。日本癌学会を始めとする各種学会に於いて、又文部省(現・文部科学省)や厚生省(現・厚生労働省)に於いて、時には領域外からの厳しい視線を受けてきた癌免疫研究を守り抜いてこられた。

とりわけ、研究活動を通じて若い人材を育成することへの配慮と情熱がいつも目立っていた。かつて、多数の研究室の参加する文部省や厚生省の班研究の発表の場は、各研究室の代表者と共に参加する若い研究者達の大切な研修の場でもあった。単なる研究成果の発表だけに留まらず、若い人材が多く先輩研究者の発表を身近で聴き、直接交流出来るまたとない機会でもあった。先生御自身が仙台の近くの作並温泉で、いつも一泊どまりで班会議を催し、多くの若い人達の育成の場にされて来たことを我々と共に懐かしんでおられたのを思い出す。

基盤的癌免疫研究会は先生から見れば、腫瘍免疫学の科学の場であり、若い人達が学ぶ学校であったと思われる。研究会が学会へと発展する時を共に見つめて頂きたかった橋本先生に感謝の念を新たにしつつ、心からのご冥福を祈る。

「橋本嘉幸先生のニューヨーク留学時代」

健康科学総合センター 高橋 利忠

橋本先生の訃報のメールがSFCIの事務局から届いた時には、なかなか事実として認めることは困難でしたが、それは現実の出来事でした。橋本先生には40年の長きに亘りご指導を賜っており、数々の思い出がございますが、あえてここでは会員の先生方があまりご存じない橋本先生の40年前の留学時代を紹介させていただきます。

橋本先生に初めてお会いしたのは1968年(昭和43年)の9月のことで、小生がニューヨークのスローンケタリング癌研究所に留学した時でした。橋本先生は当時2度目のご留学で、同年の4月よりOld先生が部長を務めておられた免疫学部門のBoyse先生の研究室で研究をされておられました。免疫学の知識も実験経験も全く無い小生の家庭教師をして下さいまして、橋本先生が翌年の3月に帰国される頃には、おかげさまで何とか研究者らしい日々を送ることが出来るようになりました。

橋本先生は当時研究がようやく開始されつつあった細胞性免疫にご興味をお持ちで、マウスTL抗原に対するキラーT細胞の研究をされておられました。実験系としては、免疫マウスの腹腔リンパ球を採取し、TL陽性の標的白血病細胞と試験管の中で混合培養し、その一部を経時的に採取し、顕微鏡下で血球計算盤を用い、標的細胞数の減少を算定し、リンパ球の傷害活性を測定する、と言う単純明快な系でした。標的細胞が傷害される過程を目で見る事の重要性をお教えいただきましたが、橋本先生は標的細胞がリンパ

球により傷害される時と、抗体と補体で傷害される時では、その形態に顕著な差があること、即ち、アポトーシスに既に気づいておられ、傷害過程を8ミリフィルムで撮影し、研究会等で発表しておられました。

また、TL陽性の白血病細胞をマウスTL抗体とモルモット補体で処理すれば、標的細胞は傷害されるが、抗体のみで一定時間処理した場合、その後新たに抗体と補体を加えても、標的細胞は傷害されなくなる、と言う奇妙な現象、即ち抗原変調が見つかっておりましたが、橋本先生は、このような抗原変調を受け、一見TLの発現が無くなったように見える標的細胞をも、TLに対するキラーT細胞は傷害出来ることを証明されました。留学中のこれら興味ある実験結果が論文発表されなかったことを今でも残念に思っております。

ところで、橋本先生はニューヨークではご家族を日本に残しての単身のご留学でしたので、10歳も年長であられましたが、独身の小生とは良い遊び仲間でもありました。毎週1回はボーリングを楽しみ、また、週末には一緒に映画を見に行ったり、中華街等に食事に行ったりしたことを懐かしい思い出として今でも良く覚えております。

1978年に帰国致しましたが、その後もSFCI、日本癌学会、文部科学省がん特定研究等では大変お世話になりましたが、まだまだご指導いただきたいことが多く残っており、先生を失ったことを極めて残念に思っております。

「橋本嘉幸先生を偲ぶ」

北海道大学 遺伝子病制御研究所 免疫制御分野 西村 孝司

今年、4月1日、基盤的癌免疫研究会の初代会長であられました橋本嘉幸先生が逝去されました。慶應義塾大学常任理事として初めて出勤されたその日、東北大学薬学部の先輩からまさかの訃報；「今、橋本先生がなくなったという情報がかんセンターから入ったけど、お前何か知っているか？」という電話が飛び込んできました。小生は秘書がびっくりするほどの絶叫をあげ、ただ部屋をうろうろするばかりでしたが、冷静になり、とにかくエープリルフルであってほしいと願い、慶應大学の河上先生や東京大学の松島先生に問い合わせたところ、松島先生から「共立薬科の知人に問い合わせたところ、本当のようだ」という知らせを受け、橋本同窓会員144名に訃報を知らせました。慶應と共立薬科の合併は普通に考えれば、吸収合併、しかし、それを1対1の合併に持ち込めたのは、橋本先生の思いがあったと確信しております。誰にも話さず、なし遂げた大偉業、その合併の日に、家を出てから数歩あゆみ、心不全で倒れました。ここでは皆様と一緒に生前の橋本先生を偲ばせていただきたいと思います。

橋本嘉幸先生は昭和5年に東京、下町に生まれた江戸っ子で、学習院高等科卒後、東大へ進学、石館守三先生のもと衛生化学を専攻されました。その後、東大薬学部助手、東京生化学研究所主任を経て東北大学薬学部教授になられ、この間、RPMI、Sloan-Ketteringに留学されました。退官後には、佐々木研究所所長、共立薬科大学理事長、慶應義塾大学常任理事を努められました。

橋本先生は発癌、癌免疫研究に生涯をささげ、数多くの業績を残されました。

発癌の領域における特筆すべき発見は膀胱癌の試験管内発癌に世界で初めて成功したことが上げられる。また、癌免疫学における功績としては、キラーT細胞が癌を破壊する様式が、抗体による破壊と異なり、核の断片化が先行して起こることを1960年代に発見していた。すなわちがんのアポトーシスを世界で始めて観察されました。LAK細胞やキラーT細胞の標的細胞破壊機構の癌治療への応用研究の他、制がん剤を封入したリポソームに癌特異的モノクローナル抗体を結合させ癌にターゲティングさせる「弾頭ミサイル療法」も開発され抗体療法の発展に寄与されました。

これらの功績に対して、高松宮妃癌研究基金学術賞(1985)、日本薬学会賞(1988)、紫綬褒章(1993)、日本癌学会吉田富三賞(1997)、叙勲(瑞宝中綬賞2006)等を受賞されました。学会活動におかれても、日本免疫学会理事、監査の他、日本薬学会や日本癌学会理事も務められ、日本癌学会会長や基盤的癌免疫研究会初代会長も務められ多くの学会の発展に寄与されました。2006年の第10回基盤的癌免疫研究会記念大会では、共立薬科大学理事長の傍ら研究された新アポトーシス機構の成果の発表もされ、本研究会には多大な貢献をされました。

小生が橋本研を去って何年たっても、あの大きな目、あのべらんめいの江戸っ子弁、辛口の評価にはたじたじでしたが、亡くなって始めて知る恩師の暖かさ、陰でいつも励ましてくれた優しさにはただ有り難うございましたと述べるしかありません。学生時代、悩みがあり、橋本先生に相談すると「まあ黙ってクリーンベンチに向かってろ！」と一言。確かに、

橋本嘉幸先生を偲ぶ

クリーンベンチに向かっていると、探究心がかき立てられ、悩み等吹っ飛んでしまうから不思議である。「悩むより、やれ！」ということである。今、その言葉の意味を学生たちに伝えています。東北大学時代、橋本先生は、いつも「教室の和を大切にしろ」とおっしゃって、橋本カラーを作り出し、それぞれの学生が不夜城のなか寝食を忘れ研究はするが、野球、テニス、卓球全ての学内対抗試合では、結束固く、いつも優勝、準優勝をする教室を築き上げました。今、自分が教室を担当する立場になり、あの頃の橋本研のような教室を作りたいと考えますが、それは果たせぬ夢のようです。

タバコが大好きな橋本先生が、ある日、目を真っ赤にされ、クリーンベンチに向かって実験していた大学院の小生に、「西村、俺はタバコをやめるから、北川先生の弔い合戦をするぞ！癌を直すぞ！」と強い口調で言ったのが今でも忘れられません。濱岡利之先生の師であられる北村先生が、会議の席上、突然倒れられた後のことでした。癌・免疫学会の蒼々たる顔ぶれが出席して、浴衣姿でだるまストーブの座敷で熱き論争をした仙台、作並温泉での橋本班班会議も今の自分を育ててくれた忘れがたい思い出であります。特に思いで深いのは、頭の毛が薄い大先生同士が、議論が白熱し、「うーん！違う！

このハゲ！」「お前にハゲと言われる筋合いはない！このハゲ！」ととても熱い免疫の論争をしており、「免疫学は徹底的に議論し、何と熱い学問なのだろう！」と感動したことである。橋本門下生で癌免疫研究を今も続ける小生や益子高(近畿大薬)、八木田秀雄(順天堂大医)、田中稔之(兵庫医療大薬)、加藤和則(札医大)等はこの班会議で知り合った諸先生にその後も大変お世話になり、先生方との交流で研究を発展させて来られたと思う。今、あらためて班会議を通して弟子に刺激的な諸先生と知り合う機会を与えて下さった橋本先生に感謝する次第です。橋本班に参加された癌・免疫学会の多くの諸先生も、作並温泉の風景と共に、橋本先生の姿と橋本先生が築かれた研究者交流の素晴らしさを思い出していただけたと思います。

発癌から癌免疫治療まで多くの知識とともにがん征圧への熱い思いを教えてくれた橋本先生、その思いは先生から我々弟子に、そして我々が今教えている学生に受け継がれていくと信じています。その思いを大切にして癌免疫研究に精進し、一日も早くがんに苦しむ患者さんに朗報を伝えたいと考えております。橋本先生、安らかに眠りください。そしていつまでも基盤的癌免疫研究会を初めとする学会の発展を見守ってください。

「橋本嘉幸先生を偲ぶ」

大阪大学 名誉教授 濱岡 利之

橋本嘉幸先生が東京生化学研究所におられた頃のことであるが、日本がん学会総会のシンポジウムで、先生がムービーで、リンパ球によりがん細胞が殺傷される映像を颯爽と供覧されていたお姿が、橋本先生にお目にかかった最初である。この映像は画期的なもので、内容はリンパ球が標的細胞に接触して細胞溶解が開始される場面と、今でいうアポトーシスと思われる機構で、がん細胞に殺細胞作用が発揮されている場面が収められたものである。これらの映像は先生ご自身も大いに誇りにしておられたものであり、ずっと後のことになるが、「がん免疫機構」に関する教育TVのプログラムを作成する際に、私自身もお借りしたことがある。橋本嘉幸先生とは、私の先生である北川正保先生を通じてお付き合いが始まり、その後、文部省がん特別研究のがん免疫研究の橋本班の班員に入れていただき、当時ほぼ定例になっていた作並温泉での「橋本班」班会議で研究報告をさせていただいたり、がん特別研究総括班の班員として、また文部省のがん特別研究の審査会でも、橋本先生とずっとご一緒させていただいた。また日本学術振興会-米国NCI間での国際事業である日米がん研究協力事業でも、日米がんセミナーでハワイや西海岸や東海岸へと、橋本先生とご一緒したことも、今では遠い思い出になりつつある。

がん研究関連の審査会やセミナー、学会や諸々の会合でも、会議途中のブレイク等で、橋本先生とはよくお話しをする機会があり、たとえば学問外のことでは、思い出すのは、橋本先生の東京のご自宅近隣の名刹で信徒代表をご自身でおつと

めになっていることや、「空」について書かれた本があるといったことなども先生からお伺いしたこともある。「空」とは、「色即是空、空即是色」の「空」のことである。

橋本嘉幸先生は東北大学薬学部では衛生化学教室を主宰され、教室では多くの立派なお弟子さんを育てられるとともに、中央では日本がん学会の理事を長くつとめられ、またがん特別研究の推進にかかる重鎮として重要な責務を完遂された。また最近では共立薬科大学理事長として慶應義塾大学との合併で生まれた慶應義塾大学薬学部の創設にも多大な力を発揮されるなど、先生ご自身の美学を見事に貫かれたとおもう。また「がん免疫研究」の発展を常々願われてきたことも、われわれが最も良く知るところである。橋本嘉幸先生には「がん免疫の研究」以外のことでも、まだまだ多くのことでお教を請いたいと思っていただけに、突如、黄泉の世界、彼岸に旅立たってしまったことは、まことに残念で、寂しい限りである。

橋本嘉幸先生、本当に長い間お疲れ様でした。長きにわたる数々のご指導に対し厚く御礼を申し上げます。

願以此功德 普及於一切 我等与衆生 皆俱成仏道

橋本嘉幸先生が、ご自身で玉石のごとく大切にしてこられた「高いところざし」は、きっと後継の方々に立派に引き継がれていくものと確信しています。

「天上の橋本嘉幸先生へ」

近畿大学 薬学部 細胞生物学研究室 益子 高

基盤的癌免疫研究会の会員の方々には驚かれるかもしれませんが、『癌と免疫、何の関係があるのだろうか?』、こんな会話が私と(現在)北大医学部教授の西村先生(以下、西村)の間に交されて30年以上たちました。情報通の西村の『橋本先生は凄い先生らしい』を頼りに、私も西村も有機合成の研究室から、橋本先生が赴任して間もない東北大学薬学部・衛生化学教室の大学院への進学を希望していました。無事合格してテーマ(癌か免疫か)も部屋(2研か4研か)をクジで決めたものの、半年ほどは何をしたらいいのかわからず、夜は毎日のように、児玉としさん、という優しいおぼさんの店で、『来年、有機系の大学院に入り直そうか』などと、酒を呑んでは落ち込んでいました。今思えば、『研究の方針は人任せにせず、自分で考えることが大事』という先生のポリシーだったと思います。私は抗体中心の液性免疫、西村は細胞性免疫を中心とした研究でしたが、橋本先生には『癌免疫による癌治療には、どちらも必要不可欠』との慧眼、信念があったと察します。先生が創設した基盤的癌免疫研究会の第12回会合に参加して、癌の抗体医療の目を見張らせる成果に感銘しましたが、抗体投与による受動免疫で免疫機能を回復した後、癌ペプチドワクチンなどによる能動免疫のフォローが大切ではないか、というコンセンサスが得られたのが、今回の研究会とも感じました。私は大学院生の5年間と、職員の11年間、橋本先生のもとで研究させていただきましたが、『益子も、もっと大人になれよ』と先生が嘆くほど、コミュニケーションを怠り、世間話もしな

かったことを後悔しています。まっとうな付き合いができるようになったのは、私が、近畿大学薬学部に移り、橋本先生も東北大学退官後、佐々木研究所の所長を経て、共立薬科大学理事長に就任してからでした。先生には、3年前の薬学始まって以来の教育制度大改革施行にあたり、6年制と4年制を併設すべきかについて助言いただき、結果として、近大薬も共立薬科も6年制に加えて、研究を重視した4年制存続に至ったのは、正しい選択と信じています。東北大学での私の研究は、診断と治療を目指した、癌細胞と特異的に反応するモノクローナル抗体の開発でしたが、日本全国の医学部の様々な部局と共同研究をする機会を得て、慶應大の佐谷秀行先生、東北大の相場節也先生など、いまだに研究を介した交遊が続いている先生も多く、これも橋本先生の顔の広さと人望によるものと感謝しています。先生の急逝は私にとって正に青天の霹靂でした。今年に入ってから、先生も思い入れがあった癌特異的なアミノ酸トランスポーター、及び細胞死を誘導するトランスフェリン受容体エピトープに関する論文3報を先生と共著で発表し、亡くなる直前まで、今後の研究の展開についてもEメールのやり取りを行っていましたのに、残念でなりません。先生の意志を継ぎ、癌治療に役立つ抗体医薬品を世に出すことを私の使命と考え、今後も癌研究に邁進することを先生にお約束して、稿を終えたいと思います。橋本先生には、私がさぼらぬよう、天上から見守って頂ければと願います。合掌。

「橋本嘉幸先生を偲ぶ」

順天堂大学 医学部 免疫学 八木田 秀雄

私は、1979年から1985年の6年間に亘って、東北大学薬学部衛生化学講座の卒業研究生及び大学院生として橋本嘉幸先生に御指導いただいた。当時の橋本先生は、東京生化学研究所から東北大学の教授になられて5年目の50歳で、ミニラ(ゴジラの息子)に似たギョロツとした目が印象的でポヤポヤとした髪の毛がまだ残ったおじさんだった。班会議等での出張が多くしばしば御不在であったが、在室時には大学院生をつかまえて、よくディスカッションされていた(あまり成果の挙がらない私はいつも逃げ回っていた)。当時の橋本研には先輩の大学院生として現北大の西村孝司先生や現近大の益子高先生といった猛者がそろっており、夜を徹して実験するだけではなく、野球やテニスといったスポーツ大会に向けての激しい練習や車を連ねての教室旅行や芋煮会といった催し物も多く、教室としての和を重んじられた橋本先生のもと、活気にあふれた研究室であった。大学院生として私に与えられた課題は、当時益子先生が作製されていたヒト膀胱癌細胞に対するモノクローナル抗体が認識する癌抗原の生化学的解析であったが、当時の橋本研にはcell surface labeling/immunoprecipitationやWestern blottingといったノウハウがなく、橋本先生の御紹介のもと、当時の東北大学医学部細菌学の石田名香雄先生の教室や愛知がんセンターの高橋利忠先生の研究室で

修行の機会を与えていただいた。また、橋本先生が班長の合同班会議(作並温泉の大広間に机を並べて皆ドテラが懐かしい)では、札幌医大の菊池浩吉先生や阪大の濱岡利之先生といった大御所や当時新進気鋭の珠玖洋先生や今井浩三先生などともお会いする機会を与えていただいた。さらには、大学院卒業後は、橋本先生の御紹介のもと、奥村康教授が着任した順天堂大学医学部免疫学研究室で20年以上を過ごすこととなった。その後も、CRESTの班会議や学会あるいはSFCIの幹事会や毎年恒例の橋本門下の新年会などでお会いする度に、私の仕事のみならず、健康管理や家族(私の妻も同門で橋本先生が仲人)のことまで御心配いただき、私にとっては師であるとともに第2の父のような存在であった。「親孝行したい時には親はなし」で、橋本先生が御存命中には先生の御恩に報いることが何も出来ないままとなってしまったことが悔やまれるが、私が最初にお会いした橋本先生と同じ年頃となった今、これからは自分が橋本先生から学んだことを若い研究者に伝えていかなければならないと痛感している。橋本先生が遺された遺産の1つであるSFCIは今後、日本癌免疫学会に発展していくことになるが、SFCI創設時の橋本先生の趣意に従い、確かな基盤研究に根ざした癌免疫療法の実現に向けて尽力していきたい。

Society for Fundamental Cancer Immunology

「橋本嘉幸先生を偲ぶシンポジウム開催のお知らせ」 「学会へ移行のお知らせ」

基盤的癌免疫研究会会員の皆様には、平素、本研究会の活動にご協力をいただき誠にありがとうございます。

さて、本年7月の総会において、本研究会は来年度、学会へ移行することが決定されました。また、4月1日にご逝去されました当研究会生みの親であります橋本嘉幸先生を偲んでシンポジウムを開催する事が決まりました。

橋本嘉幸先生を偲ぶシンポジウムは2009年4月11日、一橋記念講堂にて開催することにいたします。詳細が決まりましたら発表させていただきます。

この2点を会員の皆様にお知らせし、ご理解とご協力を賜りたく存じます。日本においては、癌の免疫療法はtranslational studyの重要な位置を占めると考えられます。従って、今後、この領域での会員の皆様の貢献と癌免疫学、分子基盤に基づいた癌の免疫療法の科学的な開発の発展のために産官学、全ての研究者間の活発な討論、情報交換の場として機能させていきたいと願っております。会員の皆様におかれましては、学会への移行にご理解をいただき、癌免疫療法研究の発展へ向け、引き続きいっそうのご尽力を賜りますようお願い申し上げます。

2008年11月 基盤的癌免疫研究会 会長 珠玖

第12回基盤的癌免疫研究会総会賛助企業及び団体(50音順)

エーザイ株式会社	日本化薬株式会社
協和発酵工業株式会社	日本メジフィジックス株式会社
キリンファーマ株式会社	ノバルティス ファーマ株式会社
ジーンフロンティア株式会社	バイエル株式会社
第一三共株式会社	富士フィルムRIファーマ株式会社
タイコ ヘルスケア ジャパン株式会社	株式会社プライミュン
大日本住友製薬株式会社	株式会社ベルセウス プロテオミクス
武田薬品工業株式会社	株式会社メディネット
田辺三菱製薬株式会社	株式会社免疫生物研究所
中外製薬株式会社	
東レ株式会社	財団法人 東京生化学研究会
株式会社ニチレイバイオサイエンス	(2008年8月)



発行：基盤的癌免疫研究会事務局

事務局：〒160-8582 新宿区信濃町35

慶應義塾大学医学部先端医科学研究所 細胞情報研究部門内

Tel:03-5363-3778、Fax:03-5362-9259、E-mail:ryoko-s@sc.itc.keio.ac.jp